

板付
12

— 板付遺跡 第72次調査の報告 —

板付 12

— 板付遺跡 第72次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1220集

— 1014 —

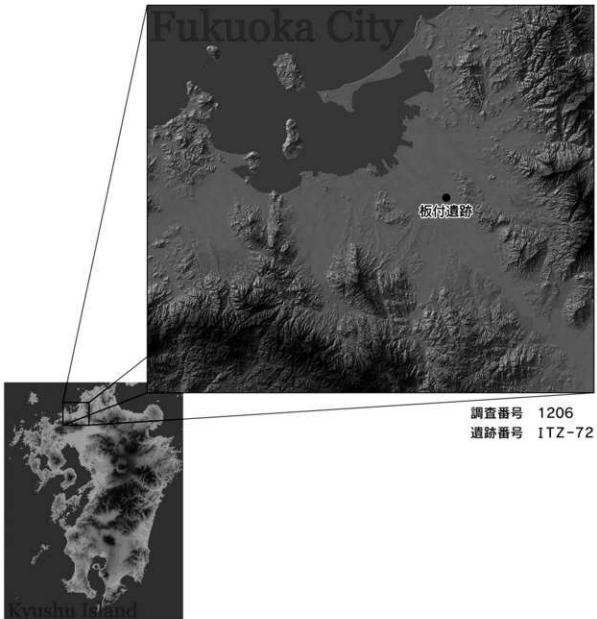
2014

福岡市教育委員会

福岡市教育委員会

いた 板付 12

— 板付遺跡 第72次調査の報告 —



2014

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存につとめているところです。

本書で報告いたします板付遺跡周辺は稲作発祥の地として全国でも特に有名な遺跡であり、稲作が我国に定着し、発展を示す貴重な遺構がみつかっています。

今回の調査でも板付遺跡中央台地東側の土地利用の変化が明らかとなり、この地域の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査において費用負担をはじめとするご協力を賜りました有限会社フリートウッド様に厚くお礼申しあげます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の記録	
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	5
3. まとめ	12
4. 自然科学分析調査（パリノ・サーヴェイ株式会社）	13

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/7,000)	3
Fig. 2 板付遺跡と既調査地点図 (1/4,000)	4
Fig. 3 第72次調査地点と周辺調査状況図 (1/400)	6
Fig. 4 第72次調査土層断面図 (1/100)	7
Fig. 5 中世水田畦畔配置図 (1/200)	8
Fig. 6 第5層出土遺物実測図 (1/2,1/3)	9
Fig. 7 夜臼式期、板付I式期調査状況図 (1/200)	10
Fig. 8 第8層出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig. 9 その他出土遺物実測図 (1/2,1/3)	12

図版目次

PL. 1 1) 調査区内盛土状況 (北から)	2) 畦畔検出状況 (北から)
PL. 2 1) 畦畔掘削状況 (北から)	2) 畦畔削り出し状況 (北から)
PL. 3 1) 足跡状遺構検出状況 (南から)	2) 足跡状遺構削削状況 (西から)
PL. 4 1) 調査区東端粗砂層堆積状況 (北から)	2) 調査区東端黒色粘土層堆積状況と試料採取状況 (北から)
PL. 5 1) 黒色粘土内浅鉢出土状況 (北から)	2) 出土遺物 (縮尺不同)

例　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成24(2012)年度に博多区板付2丁目地内で実施した板付遺跡第72次調査の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は福岡市教育委員会の加藤隆也が行った。
- (3) 遺構実測と写真撮影は加藤が行った。
- (4) この報告書の執筆・編集は加藤が行った。
- (5) 出土遺物の整理作業は増永好美が行った。
- (6) 出土遺物の実測と写真撮影は加藤が行い、浄書は増永が行った。
- (7) 本書に使用した方位は磁北であり、今回の調査・報告に係る標高は3級基準点3L12-002によるH=10.382mを基準として使用した。
- (8) 自然科学分析調査は、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
- (9) 調査に係る記録類、出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵・保管し、活用されていく予定である。

遺跡調査番号	1206	遺跡略号	1TZ-72
地番	福岡市博多区板付2丁目13-14、13-21	分布地図番号	板付24
開発面積	1,132m ²	調査面積	315m ²
調査期間	平成24年5月7日～平成24年6月13日		

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は平成24年1月23日、株式会社未来図設計より福岡市博多区板付2丁目13-14、13-21の建築物建設工事に先立って「埋蔵文化財の有無について」の照会文書を受理した。これを受けて埋蔵文化財第1課事前審査係は、計画地が周囲の埋蔵文化財包蔵地である板付遺跡内にあり、敷地内の一部は1981年に第36次発掘調査が行われていることを確認した。この調査では、弥生時代前期水田とそれに伴う水路、井堰が検出されている。今回予定されている建築物はRC造5階建建物であり、この結果をもとに協議を重ねたが、工事によってやむを得ず破壊される未調査部分について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成24年4月25日付で有限会社フリートウッドを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年5月7日から発掘調査に着手し、翌平成25年度に資料整理および報告書作成をおこなうことになった。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託 有限会社フリートウッド

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査: 平成24年度・資料整理: 平成25年度)

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課第1係長 常松幹雄

庶務 埋蔵文化財審査課管理係長 和田安之

管理係 横田 忍

事前審査 埋蔵文化財審査課長 米倉秀紀

事前審査係長 加藤良彦

主任文化財主事 佐藤一郎

文化財主事 森本幹彦

調査担当 埋蔵文化財調査課 加藤隆也

なお、文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川と平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中流域から上流にかけては多くの支流があり、各支流間には南北に延びる中・低位段丘が多くみられる。現在の御笠川は中流域で支流である諸岡川と分岐し、大きく東側へ蛇行しており、板付遺跡はその御笠川と諸岡川に挟まれた中位段丘Ⅱ面とその周辺沖積地に立地する。

板付遺跡は、南北約500m、東西約120m、頂部標高10~20mの中位段丘Ⅱ面上に位置し、2つの鞍部を挟み、3箇所の台地部に分けられる。それぞれ北台地、中央台地、南台地と呼称され、環濠を中心とする国指定史跡板付遺跡はこの中央台地に位置する。

板付遺跡の台地部周辺の沖積地では、中央台地の西側と東側で水田施設の一部が確認されている。また、中央台地の西側沖積地、環濠から南西約50mに位置する調査地点、及び県道調査区で突帯文土器単純期、板付Ⅰ式期の水路、井堰、水口、畦畔が検出されている。この中で突帯文土器単純期の水路（幅約2m、深さ約1m）は台地西側縁辺を北流し、その取・排水は、この水路より西方約80mに北流する旧諸岡川に求められると推定されている。板付Ⅰ式土器期の水路も前代同様、西側縁辺部を北流する方向で検出された。更に、中央台地と南台地の鞍部や中央台地の東側沖積地に位置する調査地点でも、この時期の水路が検出され、台地東側沖積地の開田が考えられている。

本遺跡を中心にして周辺の遺跡を概観してみると、南方約2kmにはこれと対峙して、明治32年に発見された甕棺内より前漢鏡30余面、銅劍、銅矛などが出土した須玖岡本遺跡を含む春日丘陵からの低台地がある。ここから博多駅にかけての範囲は奴国の中心地と言えているところである。そのほぼ全域に遺跡が分布しており、須玖本遺跡、須玖坂本遺跡、須玖唐梨遺跡、岡本パンジャク遺跡、赤手井遺跡、大谷遺跡等からは青銅器工房関連遺構がみつかっている。春日丘陵より北東側に繋がる低台地上には、ナイフ形石器などを主体とする旧石器時代遺物をはじめとして弥生時代から古代にかけての遺構や遺物がみられる南八幡遺跡、雜隈削跡などが点在している。西南方の井尻低台地上には井尻B遺跡・五十川遺跡などが位置している。井尻B遺跡では30数次におよぶ調査が行われており、第2・6・12次調査からは旧石器代遺物が出土し、第6次調査では鏡と鎌の鉄型が出土するなど弥生時代から古墳時代の集落が広く分布している。また古代以降の井尻庵寺関連遺構なども注目されている。その北側、本遺跡から北西の方には比戸・那珂遺跡がある。旧石器時代遺物の散布分布もみられるが、弥生時代中期から古墳時代初期にかけて計画的な「街区」の形成がみられ、「交易センター」としての都市化がおこなわれたと考えられている。

御笠川以東では、四王寺山塊より北へ延びる月隈丘陵の尾根・山麓部における遺跡の分布は濃厚であり、特に金隈遺跡、上月隈遺跡、下月隈遺跡、月隈宝満尾遺跡では袋状防護穴や土壙墓が確認され、銅鏡や玉類が出土している。なお金隈一帯の尾根上には群集墳として知られる持田浦古墳群が広がっている。福岡空港内にある沖積高地に位置する雀居遺跡からは、刻目突帯文土器期から前期にいたる集落や墓地がみつかり量多の木製品が出土した。また、礎板を有する大型掘立柱建物をはじめ弥生時代後期の遺構・遺物も豊富にみつかっている。

最後に、西側の諸岡川を挟んだ近接地には、諸岡遺跡が位置している。旧石器時代遺物の散布から弥生時代の集落、墓地などの調査がおこなわれており、朝鮮系無文土器や貝輪等の貴重な遺物が出土している。

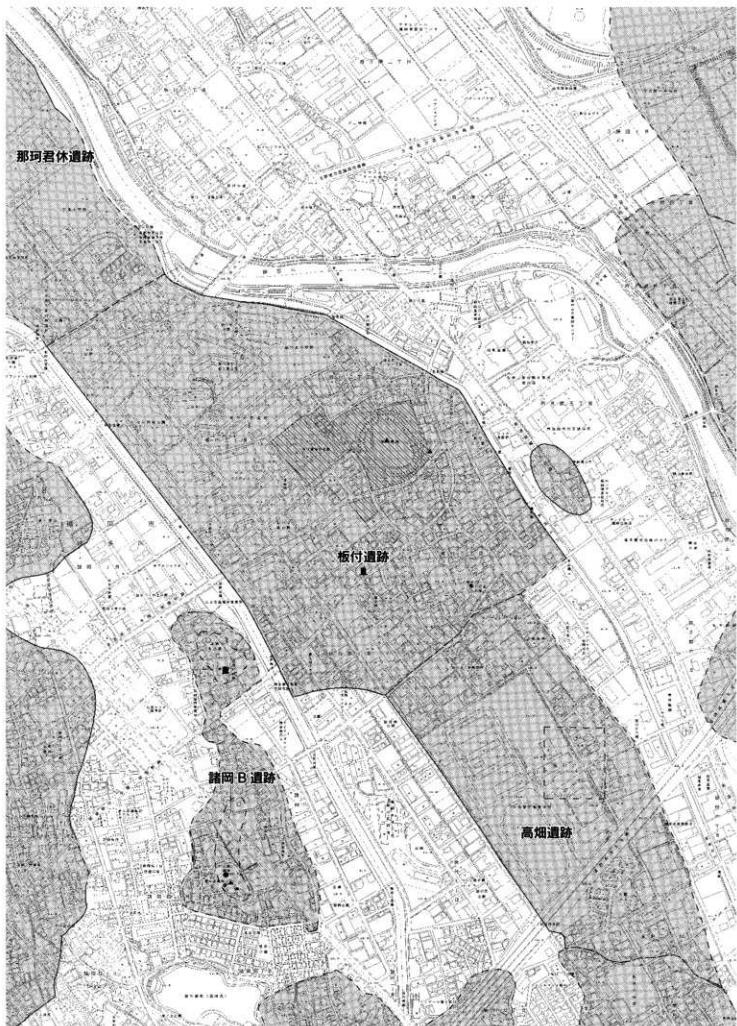


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/7,000)

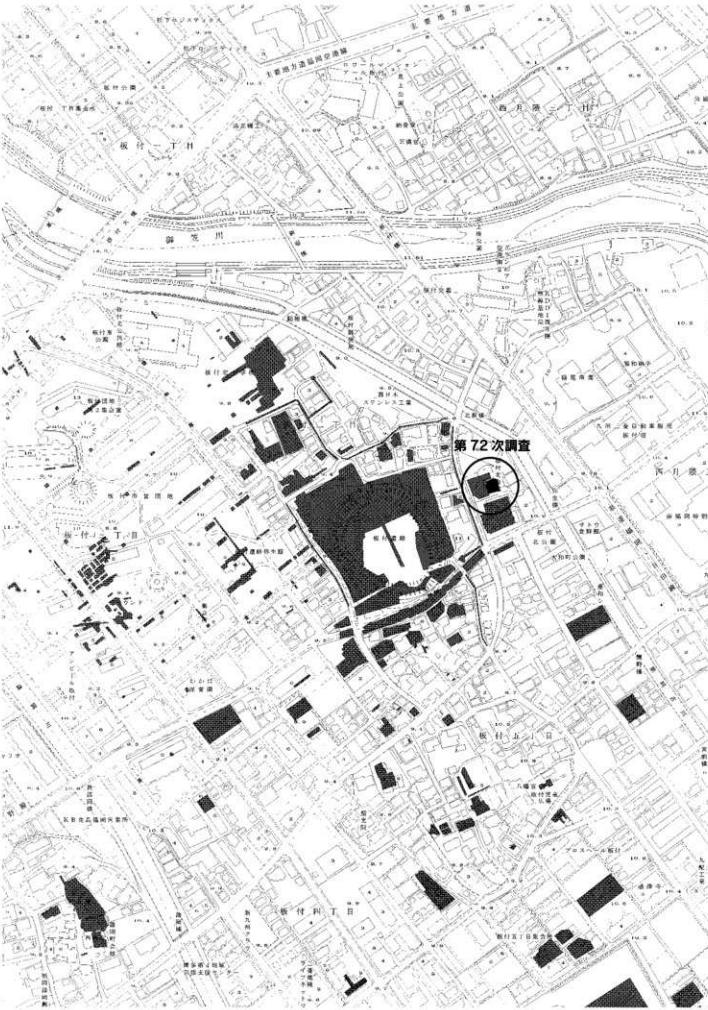


Fig. 2 板付遺跡と既調査地点図 (1/4,000)

- 4 -

第三章 調査の記録

1. 調査の概要

調査対象地は国指定史跡板付遺跡範囲の東側に位置しており、1981(昭和56)年に敷地の西側を中心に第36次調査として発掘調査されている(Fig.3)。その内容は中世の水田畦畔と板付I～II式期の水田と井堰や水口などの水田付属施設である。また、その下層では夜白式期の旧河川流路が確認されている。南側隣地の板付北会館を含む建設工事に伴う第34次発掘調査においては、中世の礎盤を有する建物、祭祀的要素をうかがわせる弥生時代終末期の土壇、弥生時代後期前半の井戸状・壙状および柵が確認されている。さらに、第36次調査の板付I式期の水路につながるところと考えられる西側肩部も検出されている。

調査地内は前回の発掘調査以降盛土が行われており、崩落防止のため調査区壁に安全な法面をとつて5月7日より重機による掘削を開始した。約1.8m掘削を行った面で昭和期の地表面を確認した。今調査にて確認すべき遺構面は、現地表面下数mの弥生時代水田面であるため、大量の排土処理を場内にて行う必要が求められた。そのため、調査区を調査手順上東西2区に分け、排土を繰り返すことによって処理することにした。

まず、東側約半分に調査区を設定し掘削を始めた。旧地表土から約70cm掘削を進めた面にて南北方向の畦畔を確認した。田面の掘削調査と畦畔の状況を記録した後、調査区3面に排水と土層堆積状況の観察を兼ねたトレンチを掘削した。掘削の際、下層の黒褐色粘土層内から夜白式の浅鉢がつぶれた状態で出土した。畦畔確認面から黒褐色粘土層までの約40cmには幾つかの水田面の存在が想定されるが、面的に広がりを追えるのは1面のみであり、その上面にて精査作業がおこなった。畦畔、溝などの水田付属施設などの構造物は確認されず、更に掘削を進め黒色粘土層の上面にて精査作業を行った。黒色粘土層の直上に部分的に堆積する粗砂層は弥生時代中期の遺物を包含しており、中期段階に田面の切り下げを行ったことを示唆する資料を得た。その後、黒色粘土層の一部を掘削した結果、下層には粗砂層が堆積しており、黒色粘土層は東に薄く、西側に向て厚く堆積している状況を確認した。

5月22日より調査区の反転作業を開始した。西側調査区は昭和期の調査と連続させる位置にあたり、まず東側調査区にて畦畔を検出した水田面まで掘削し、調査区周間に土層堆積状況観察用トレチの掘削を行った。遺構面と土層断面の精査を行ったが、畦畔を含め水田の構造的な遺構は検出されなかった。その後、下位層の黒色粘土層の直上までの約30cmを人力にて約10cm毎に面的な精査作業を行なながら掘削を進めた。最終精査面である黒色粘土層上面の精査では、粗砂を覆土とする足跡状の凹みが確認された。最終的には黒色粘土層の掘削を行い、最下層の粗砂層まで人力掘削を行い科学分析のための土壤試料を採取し、調査区壁面の土層堆積状況の記録作業を行った。

そして6月13日、埋戻し作業を行い発掘調査を終了した。

2. 遺構と遺物

今回の調査では、古代末～中世と考えられる水田面とその畦畔を検出した。

第36次調査にて4層水田と呼称されて記述されている水田面である。前調査同様に発掘区全体に検出されるが上層との間に砂による間層がなく、面的な広がりとして捉えることはできなかった。調査としては水田畦畔の天端が露出し、その方向が確認できるレベルをもって平面的に広げて遺構精査作業を行なったものである。検出された水田畦畔は幅50～80cmであり、台地の裾を巡るように緩やかに

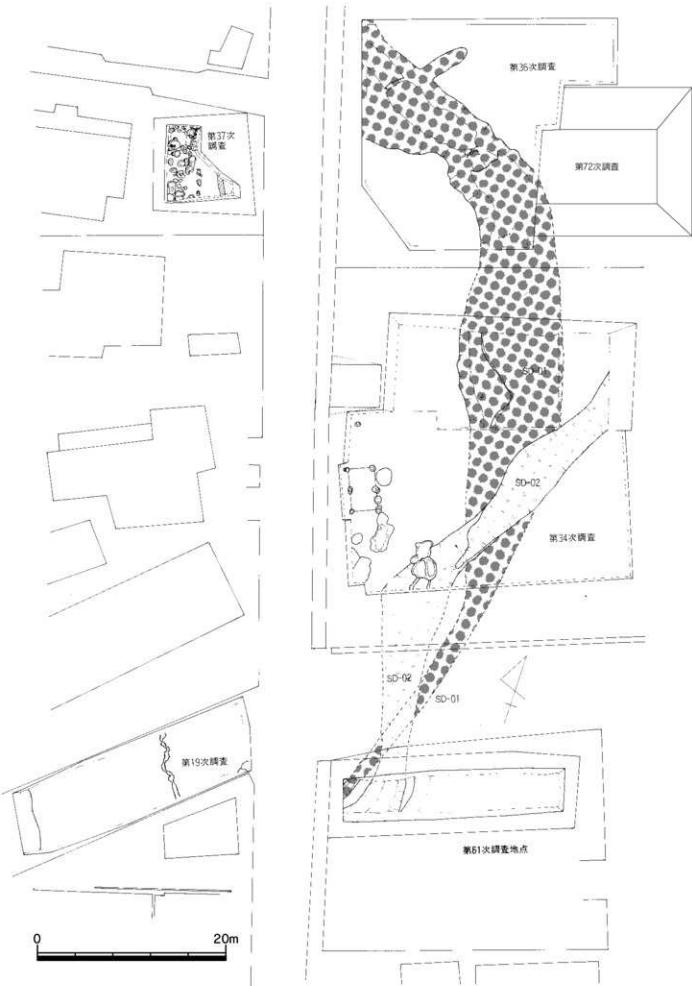


Fig.3 第72次調査地点と周辺調査状況図 (1/400)

- 6 -

西側に凸出している。前調査の南北方向の畦畔から約17mの距離をもってほぼ平行に配置されている。耕作土の上面は畦畔を境に色調が明瞭に異なり、西側は茶褐色砂質土であるが、東側は灰黒色粘質土であった。土層断面の観察において明瞭な差異は見られないことから、田面を埋没させた洪水土の流入方向や埋没時間の差に起因するものと考えられる。耕作土を掘削したが、その造営時期や埋没時期を示す遺物は出土しなかった。

水田時期を直接しめす遺物は出土していないが、その造営時期を考える上で関連するのが水田面直下層の第5層である。5層は前調査でも記述されているように「混砂土器層」とも呼べるほどの多量の土器片を含む整地層であり、検出された畦畔はこの5層を削り出して敷設されたものである。今調査

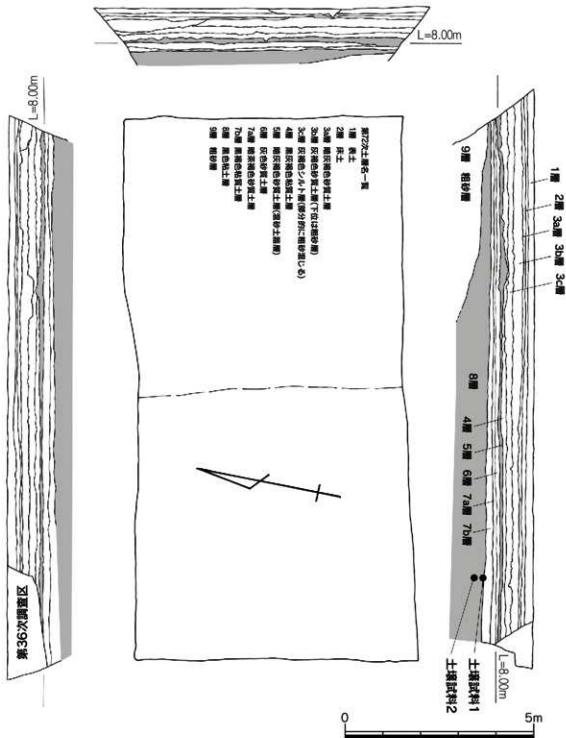


Fig.4 第72次調査土層断面図 (1/100)

- 7 -

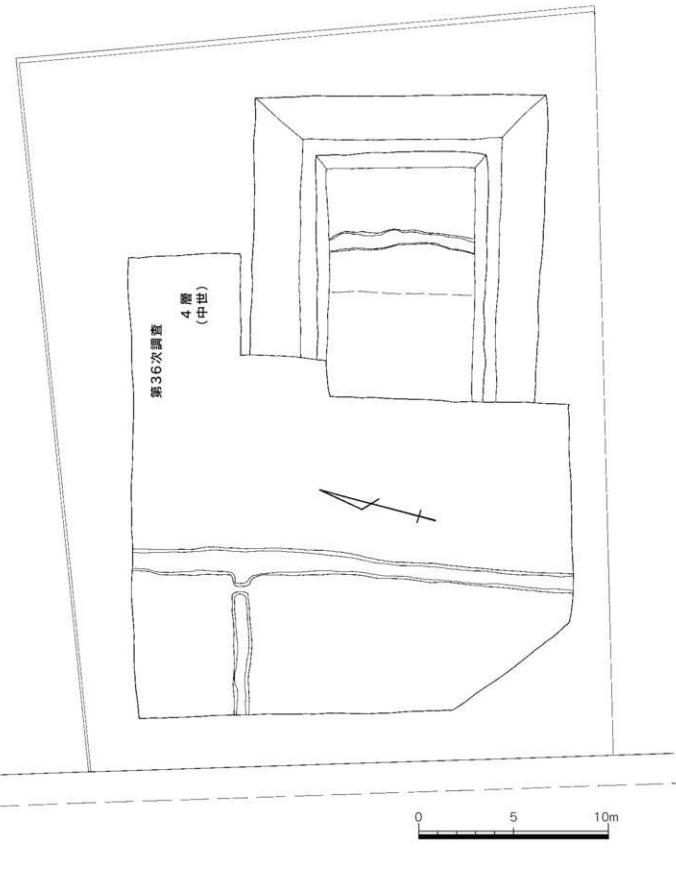


Fig.5 中世水田畦畔配図 (1/200)

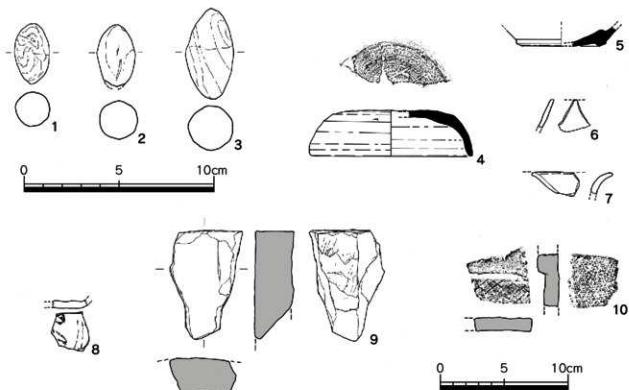


Fig.6 第5層出土遺物実測図 (1/2,1/3)

ではそれほど遺物密度は高くはなかったが、比較的多くの遺物が出土している。

出土遺物 (Fig.6 PL.5) 1～3は弥生時代の投弾である。1は赤色を発し、胎土は密、焼成はやや不良である。ほぼ完形であり、全長3.2cm、最大径1.9cm、重量7.3gである。2は黒灰色を発し、胎土は密で、焼成は良い。一部欠損しており、残存長3.2cm、最大径2.0cm、重量9.0gである。3は淡灰黄色を発し、胎土は密、焼成はやや不良である。ほぼ完形であり、全長4.7cm、最大径2.5cm、重量23.2gと最も重い。4は須恵器の杯蓋である。器高3.5cm、口径12.4cmである。天井部にはヘラ記号がみられる。6世紀後半から末ごろのものと考えられる。5は高台付杯の底部破片である。高台径は7.0cmであり、底部端に貼り付けられている。古代以降の遺物である。6・7は越州窯系青磁の破片である。6は碗の口縁破片である。釉薬は淡オリーブ色に発色する。7は水注の口縁破片である。釉薬は淡オリーブ色に発色する。10世紀末から11世紀ごろの遺物である。8は土師器杯の底部破片である。底部外側に墨痕がみられ墨書き土器の可能性が考えられる。9・10は瓦片である。9は白黄色を発し、厚さは2.8～3.1cm、胎土には1～2mm大の砂粒を含んでいる。10は白灰色を発し、厚さ1.1～1.5cmである。外側には格子目タキ痕が、内面には布目痕がみられる。

以上のことから、今調査にて第5層から出土した遺物の年代は、前調査報告書に記述されている「基盤整地層中のもつとも新しい年代の遺物からは、12世紀以降の開田と考えられる。」の文言を裏付ける成果となった。ただ、その整地層が広範囲に及ぶ規模の大きな整地作業であることや、以前から指摘されているとおり、出土遺物が特殊であることは今後も注視しておく必要がある。

整地層である第5層下位から後臼式期遺物を包含する第8層黒色粘土層までの約30cm間には、前調査で検出されている板付1式期の水路東側立ち上がりがみられる配置であった。そのため、調査区南側壁面の土層堆積状況をもとに数回に分け、一段掘削してはその度に精査作業をおこなうという手順を繰り返した。しかし、土層の堆積状況は水平堆積を呈しており、また今調査区全体が後臼式期旧河

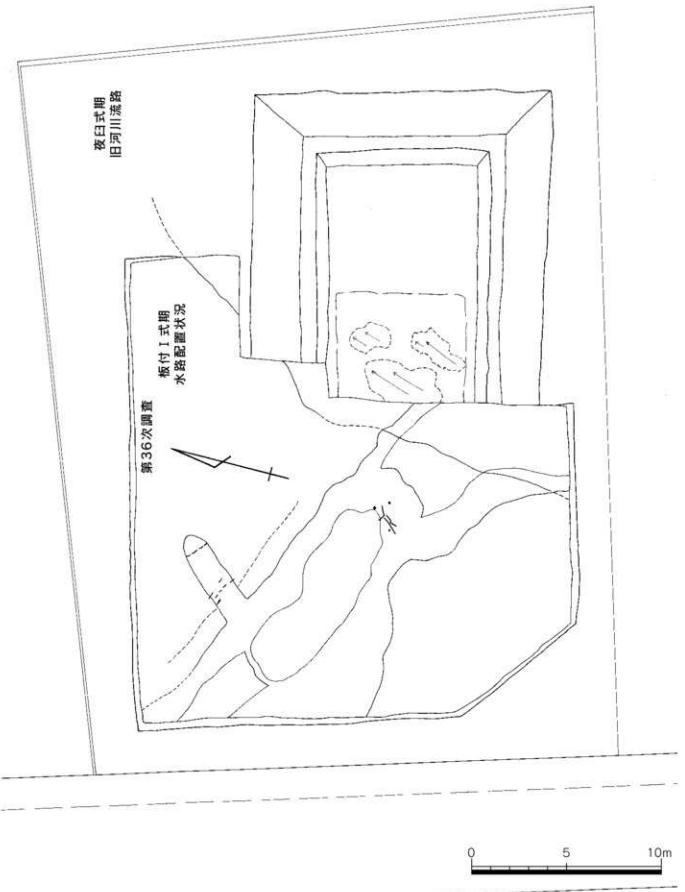


Fig. 7 夜臼式期、板付Ⅰ式期調査状況図 (1/200)

- 10 -

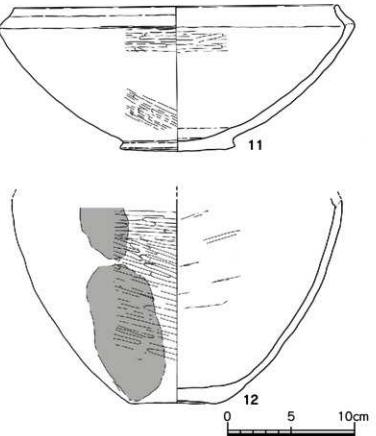


Fig. 8 第8層出土遺物実測図 (1/3)

には弥生時代中期の遺物が含まれている。

出土遺物 (Fig.9) 15は弥生時代中期後半の丹塗り甕の口縁部破片である。復元口径は27.8cmである。口縁下に断面三角形の突唇を貼り付けている。

第8層の黒色粘土層は調査区全面に及んでいる。調査区南側の壁面観察においては東側端の堆積がもっとも薄く約10cmであり、西側端では約75cmの厚さで堆積している。8層自体の堆積は、一部粗砂層含む部分はみられるものの均一であり、上位、中位、下位ともに大きな堆積による変化はみられない。ただし、掘削時にローリングをあまり受けていない遺物が出土する。

出土遺物 (Fig.8, PL.5) 11は胴部上半が「く」字形に強く屈曲する浅鉢である。東側調査区の排水溝掘削時に伏せた状態で出土した。器高は11.3cm、口径25.1cm、底径8.8cmである。色調は黒灰色を発し、器面調整は内外面とも研磨を施している。12は卵形の胴部で、胴部と頸部の境に稜をもって屈曲する壺である。頸部は欠損しており、胴部最大径は26.0cm、底径6.5cmで上げ底になっている。外面に焼成時の煤跡がみられる。吉留秀敏の分類によれば、11は浅鉢1類で夜臼I式期に、12は壺1類で夜臼II式期に属する。

調査終了時に第8層がもっとも厚く堆積している調査区西側にて、科学分析のための土壤試料2点の採取を行った。土壤試料1は約75cm堆積する黒色粘土層の上位にあたる標高7.7mにて採取し、土壤試料2は資料1の下30cm、標高7.4mにて採取をおこなった。

その他の遺物

黒色粘土上面にて出土した遺物を図示する。

川流路のなかに位置しているため地山の青灰色粘土は存在せず、緩やかな水路の立ち上がりを検出することはできなかった。あわせて、杭や柵などの木材などによる構造物も検出されなかった。

黒色粘土上面での遺構精査作業において、足跡状の遺構を複数検出した。洪水由来である粗砂の間層としてももっとも顕著であったのが、黒色粘土層直上のこの堆積であった。東側調査区においては遺存状況が悪く、西側調査区においてはその集中部が幾つかみられた。足跡状の凹みを粗砂が覆っており、砂目の方向から南側からの流れ込みをしめていた。足跡状遺構は幅5cm、長さは20~24cm程度のものが多く、指の形を残すものや歩行の方向をしめすものなどはみられなかった。粗砂からの出土遺物

- 11 -

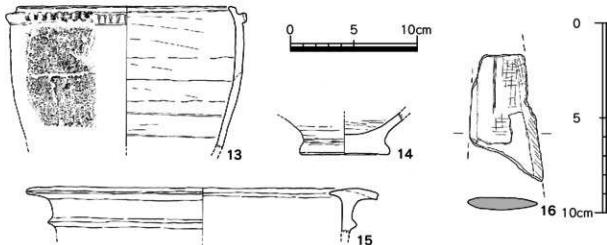


Fig. 9 その他出土遺物実測図 (1/2,1/3)

出土遺物 (Fig.9, PL.5) 13は刻目突帯文土器の裏である。突帯は口縁端からやや下に貼り付けており、刻目は荒い。粘土帯の接合は内傾接合である。14は鉢の底部である。底径は7.0cmであり内面は研磨している。16は石劍の破片である。石材は粘板岩系のもので最大遺存幅は3.6cmである。

3.まとめ

今回の調査では、当初予想された第36次調査他にて外環濠(SD-01)とされている溝の東側立ち上がりは確認されなかったが、中央台地の東側の状況を更に明らかにすることができた。

板付遺跡では、まず台地西側の諸岡川周辺にて夜臼I式期に遡る水田が営まれたことが知られている。この時期、中央台地の東側は河川の流路が安定せず水田耕作は行われていないとされてきたが、水田耕作の可能性が今回の調査結果から考えられるようになった。夜臼I式期に当該地の河川は後退し、氾濫原の埋没を経てすでに後背湿地状地の地形となっており、水田開発が可能な状況であったと考えられる。氾濫原理没後に後背湿地状地になっていた時の堆積土とと考えられる黒色粘土を採集し、花粉分析とイネ属同定の自然科学的分析をおこない、当時の自然環境の復元をおこなった。その結果、常緑針葉樹林がひろがる開けた場所に生育する草木の花粉が優占しており、草地のような環境であったと推定された。また、イネ科花粉の中ではイネ属花粉の占める割合が上層では30%以上であり、調査地及びその周辺でも稻作がおこなわれていた可能性が指摘された。

板付I式期の外環濠(SD-01)の外側立ち上がり肩部は検出されず、その大きな要因が弥生時代中期後半ごろにおこなわれた水田面の切り下げにあると考えられる。黒色粘土の堆積面直上から弥生時代中期の遺物が出土することから、当該期に他遺跡でもみられる水田区画の拡大を目的とした土木工事がおこなわれたと推測される。

また、第4層の中世とされている水田畦畔においては、第36次調査にて検出された畦畔と約17mの距離を持って、ほぼ平行に配置された畦畔を確認し調査成果をさらに発展させることができた。この畦畔は、古代の遺物を多く含む整地層を削り出すことによりつくられている。中央台地周辺では台地の北側に位置する第60次調査でも同様の整地層が確認されており、その範囲の広さから規模の大きさがうかがえる。そして、その整地層内には瓦や輸入陶磁器など特異な遺物が含まれており、古代期の板付台地上の建物群の解明にも注目したい。

<参考> 吉留秀敏1994「板付式土器成立期の土器編年」『古文化談叢』第32集

4.自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

福岡県福岡市博多区板付に所在する板付遺跡は、福岡平野のほぼ中央に位置する。標高7~9mほどの段丘と周辺の沖積地に立地する。縄文時代晚期・弥生時代初頭から中世にわたる遺跡である。

第72次調査区における発掘調査では、整地層の下位に層厚約30cmの弥生時代中期土器を含む層が堆積していることが確認され、さらにその下位に、層厚最大80cmを測る夜臼式期の遺物を包含する黒褐色粘土層が検出された。また、この黒褐色粘土層の上層部では、足跡跡の落ち込みが部分的に検出されている。

今回の分析調査では、夜臼式期の黒褐色粘土層より採取された土壤試料を対象に、稲作開始期における古植生の変化について確認するため、花粉分析・イネ属同定を実施する。

1.試料

試料は、板付遺跡第72次調査区で確認された、黒褐色粘土層の上部で採取された土壤（試料名：黒褐色粘土①上）と、中部で採取された土壤（試料名：黒褐色粘土②下）の計2点である。これら2点について、花粉分析・イネ属同定を実施する。

2.分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトナリス（無水酢酸9:濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有的現生標本や島倉（1973）、中村（1980a）等を参考にする。

イネ属については、検出されるイネ科花粉の表面細胞構造、発芽孔の肥厚状況、粒径などを考慮し、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の差別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。

3.結果

結果を表1、図1に示す。黒褐色粘土①上、②下共いずれも花粉化石は豊富に産出したが、保存状態は良好とはいえない。花粉外膜が破損あるいは溶解している個体が多く認められた。また、いずれの試料もシダ類胞子が多産する。

木本花粉についてみると、2試料とも多産する種類は類似しており、マキ属、モミ属、マツ属、コナラ属コナラ属、コナラ属アカガシ属、シイ属等が多く認められ、ツガ属、スギ属、ハンノキ属、クリ属、エノキ属—ムクノキ属等を伴う。

草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科を多く産出し、サナエタデ節—ウナギソカミ節、ナデシコ科、セリ科、ヨモギ属、キク科等を伴う。また、両試料からガマ属、黒褐色粘土②下からサジョモダカ属などの水湿地生植物が、わずかではあるが検出される。なお、栽培種であるイネ属に由来する花粉は、2試料とも確認された。イネ科花粉中におけるイネ属花粉の占める割合は、黒褐色粘土①上が20.0%、黒褐色粘土②下が38.2%であった。

4.考察

今回分析調査を実施した黒褐色粘土層の2試料（黒褐色粘土①上、②下）からは、花粉化石が豊富に検出されるものの、花粉外膜が破損・溶解しているなど、保存状態の悪いものが比較的多く含まれていた。花粉やシダ

表1. 花粉分析・トネ属同定結果

種類	ITZ-72 黒褐色粘土 ①上 ②下	
	木本花粉	草本花粉
ヤマノ属	24	29
モミ属	25	38
ツガ属	4	4
マツ属複合束縛属	19	22
マツ属(不明)	38	41
スギ属	7	4
マツノ属	1	-
ヤマモモ属	2	-
サワグルミ属	1	1
カバノキ属	-	-
ハンノキ属	5	10
ブナ属	1	-
コナラ属コナラ亜属	21	22
コナラ属アカガシ亜属	48	24
クリ属	9	3
シイ属	19	12
ニレ属・ケヤキ属	2	-
エノキ属・ムクノキ属	5	3
ナハチ葉属	1	-
アカガシ属	1	-
モチノキ属	1	1
ノブノリ属	3	-
グミ属	-	1
ウコギ科	1	-
カキノキ属	2	1
ガマズミ属	-	-
草本花粉	2	2
ヤマオダ力属	-	1
イネ属	13	21
他のイネ科	52	34
カヤリギク科	29	46
クワ科	1	-
サンクタデ節・ウナギツカミ節	9	7
アカザ科・ヒユ科	-	2
ナデコ科	6	2
カラマツソウ属	-	1
アブラナ科	-	-
バラ科	-	1
マメ科	-	1
セリ科	3	2
オミナエシ属	-	-
ヨモギ属	2	2
キク科	2	3
タンポポ科	1	-
不明花粉	18	13
シダ類植物		
ヒカゲノクズラ属	6	14
ゼンマイ属	-	1
イノトソウ属	18	25
他のシダ類植物	329	466
合計	240	219
木本花粉	121	127
草本花粉	18	13
不明花粉	353	505
シダ類植物	714	852
合計(不透明を除く)	714	852

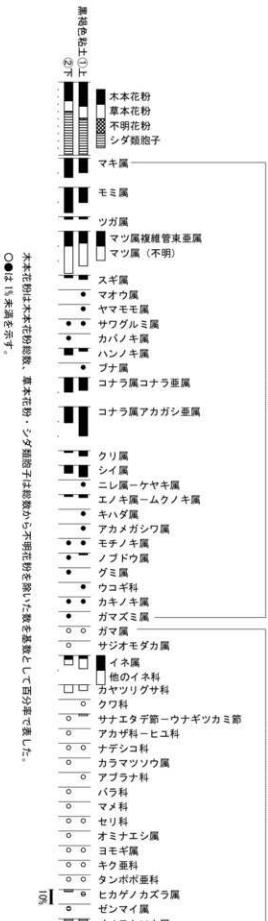
代表的な種類である。このことから、当時の本遺跡周辺の森林線や博多湾沿岸などにマツ属が生育していた可能性がある。福岡平野における既存の調査事例をみると、後氷期にニレ属・ケヤキ属、エノキ属・ムクノキ属、アカガシ属、コナラ亜属等の落葉広葉樹が優占していたが、約8,100年前にアカガシ亜属、シイ属などの暖温帯種が増加に転じ、約6,000年前の繩文海進最大期前に落葉広葉樹林はほぼ消滅し、照葉樹林の最盛期に達したと考えられている（畠中ほか,1998など）。また、板付遺跡の1971年～1974年調査で実施された花粉分析結果をみても、少なくとも3,430年前以前～2,640年前以降とされる暦準でアカガシ亜属、シイ属を主体とした花粉

種胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なり、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高くなっている（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）。今回の分析試料では木本花粉全体における針葉樹花粉の割合が高く、黒褐色粘土①上で約48.8%、黒褐色粘土②下で約63.0%を占め、さらに両試料ともシダ類胞子が多量する傾向が認められる。これらのことから、今回の分析調査によって得られた花粉化石群集は分解に強い花粉が選択的に多く残されており、当時の周辺植生を正確に反映していない可能性がある。このことを考慮した上で、2試料の群集の比較および古植生の検討を行う。

黒褐色粘土①上と黒褐色粘土②下の木本群集および草本群集を比較すると、木本花粉ではモミ属が黒褐色粘土①上で多く、コナラ属アカガシ亜属が黒褐色粘土②下で多い。シダ類胞子は黒褐色粘土②下で多くなる。このような若干の相違点はあるものの、基本的には両試料の花粉群集中大きな変化は認められないことから、両試料の堆積期間内で古植生の著しい変化はなかったと考えられる。

木本類をみると、いずれの試料も花粉化石群集は類似しており、マキ属、モミ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属等が多く認められ、ツガ属、スギ属、ハンノキ属、クリ属、エノキ属ムクノキ属等を伴う。このうち、アカガシ亜属、シイ属は暖温帶常緑広葉樹林の主要構成要素であり、マキ属、ヤマモモ属等も構成要素である。よって、周辺にはアカガシ亜属、シイ属、マキ属などからなる森林が存在し、モミ属、ツガ属、スギ属等の針葉樹やコナラ亜属、クリ属等の落葉広葉樹も、部分的に生育していたと考えられる。コナラ亜属の一部やエノキ属ムクノキ属、サワグルミ属、ニレ属・ケヤキ属などには、河畔などに生育する種類も含まれることから、御笠川・諸岡川などの周辺河川沿いの植生を反映するものが含まれている可能性がある。また、マツ属のうち、亜属まで区別できたものは全て複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能であり、極端な闊樹であることから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の

図1. ITZ-72における花粉化石群集



○●は1%未満を示す。
×は1%未満を含む。

○●は1%未満を示す。
×は1%未満を含む。

化石群集が得られている（中村・畠中,1976）。よって、黒褐色粘土層が堆積した頃の本調査地点周辺でも、アカガシ亜属、シイ属を主体とした常緑広葉樹林が優占し、標高の高い後背丘陵・山地部や河川沿いなどにコナラ亜属などの落葉広葉樹も分布していたと推測される。

一方、検出されたイネ科花粉中には、栽培種のイネ属花粉が含まれていた。また、サジオモダカ属は水田雜草としても一般的であることから、これらも周辺の稲作地に生育していた可能性がある。なお、イネ科花粉全体におけるイネ属の占める割合は、黒褐色粘土②下で38.2%、黒褐色粘土①上で20.0%であった。中村（1980b）は、現在の水田耕土において、花粉の動態研究を行った結果、イネ科花粉の中でイネ属花粉の占める割合が30%以上であることから、イネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせると述べている。これと比較すると、2試料のうち黒褐色粘土②下で30%以上を示すことから、本調査地点及びその周辺で稲作が行われていた可能性がある。なお、前出の1971年～1974年調査地点では花粉分析の結果から、2,880年前には集約的な栽培が営まれていたと考えられている（中村・畠中,1976）。今回、夜臼式期と考えられる黒褐色粘土層から比較的高い割合でイネ属花粉化石が検出されたが、この結果は1971年～1974年調査地点の分析調査の結果と矛盾しない。

また草本類についてみると、イネ科、カヤツリグサ科を多く産出し、サンエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、セリ科、ヨモギ属、キク科等を伴う。これらはいずれも、開けた明るい場所に生育する「人里植物」を含む分類群であり、それ以外に検出される種類にも同様の生育環境を示すものが多く認められる。このような分析結果は調査地点周辺の植生に由来するものと思われ、開けた場所に生育する植物の種類数が多いことから、周辺は草地のような環境であったと推定される。これは付近で稲作が行われていたことと関連する可能性がある。

今後は周辺の調査地点でも同様の分析調査事例を蓄積し、解析を行うことにより、稲作地と非農産域の空間構成を把握できるものと期待される。また、稲作開始期における古植生の変化という課題については、1971～1974年の調査で行われているように、より下位（稲作開始前）の層序及び上位の層序を対象とした分析調査を行い古環境の変遷について検討することが望まれる。さらに、珪藻、植物硅酸体、種実洗い出し・同定などについて分析調査を行い、垂直的・平面的における環境の変化を総合的に検討することが重要になるであろう。

引用文献

畠中健一・野井英明・岩内明子,1998,九州地方の植生史,安田喜憲・三好教夫（編著）,図説 日本列島植生史,朝倉書店,151-161.

中村 純,1974,イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として,第四紀研究,13,187-193.

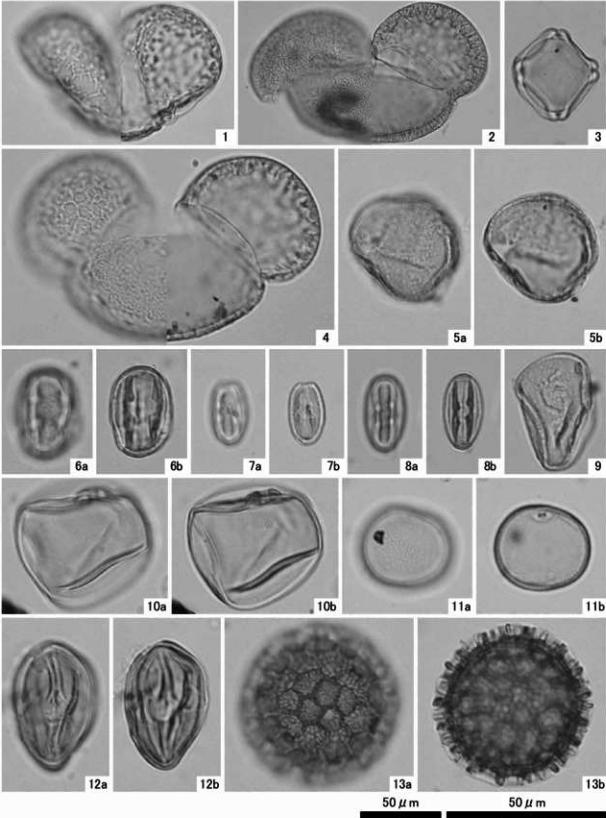
中村 純,1980a,日本産花粉の標徴 Ⅰ Ⅱ（図版）,大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.

中村 純,1980b,花粉分析による稲作史の研究,自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 一総括報告書-,文部省科研費特定研究「古文化財」総括班,187-204.

中村 純・畠中健一,1976,板付遺跡の花粉分析学的研究,板付 一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書 1971～1974- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 下巻 本編図版・付録,福岡市教育委員会,29-52.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態,大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

花粉化石



- 1. マキ属(ITZ-72黒褐色粘土①上)
- 2. モミ属(ITZ-72黒褐色粘土①上)
- 3. ハノノキ属(ITZ-72黒褐色粘土②下)
- 4. マツ属(ITZ-72黒褐色粘土①上)
- 5. コナラ属/コナラ属(ITZ-72黒褐色粘土①上)
- 6. コナラ属/アガシ属(ITZ-72黒褐色粘土①上)
- 7. クリ属(ITZ-72黒褐色粘土①上)
- 8. シイ属(ITZ-72黒褐色粘土①上)
- 9. カヤツリグサ科(ITZ-72黒褐色粘土①上)
- 10. イネ属(ITZ-72黒褐色粘土②下)
- 11. カキ属(ITZ-72黒褐色粘土②下)
- 12. カキ/キ属(ITZ-72黒褐色粘土②下)
- 13. サナエタデ節－ウナギツカミ節(ITZ-72黒褐色粘土①上)

13. サナエタデ節－ウナギツカミ節(ITZ-72黒褐色粘土①上)



1) 調査区内盛土状況（北から）



2) 瓦畔検出状況（北から）



1) 瓦畔掘削状況（北から）



2) 瓦畔削り出し状況（北から）



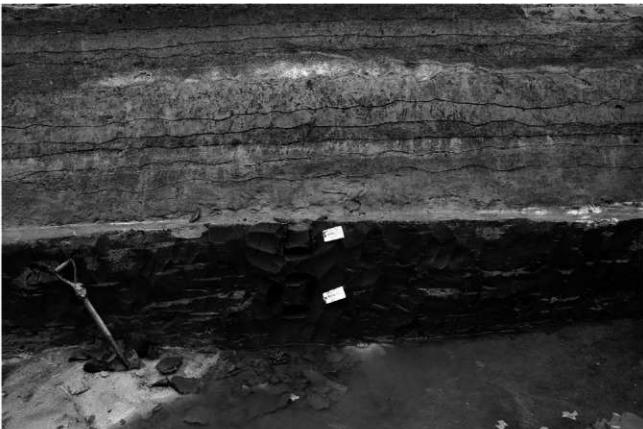
1) 足跡状遺構検出状況（南から）



2) 足跡状遺構掘削状況（西から）



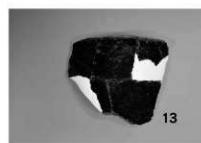
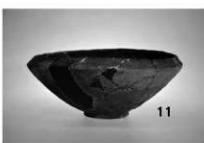
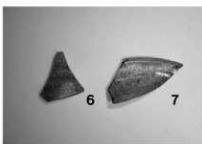
1) 調査区東端粗砂層堆積状況（北から）



2) 調査区東端黒色粘土層堆積状況と試料採取状況（北から）



1) 黒色粘土内浅鉢出土状況（北から）



2) 出土遺物（縮尺不同）

— 報告書抄録 —

書名	板付 12
ふりがな	いたづけ 12
副書名	板付遺跡 第72次調査の報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1220集
編著者名	加藤隆也
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20140324
作成法人ID	40130
郵便番号	810-8621
住所	福岡市中央区天神1丁目8番1号
遺跡名	板付遺跡
ふりがな	いたづけいせき
遺跡所在地	福岡市博多区板付2丁目13-14,13-21
市町村コード	40130 遺跡番号 0094
北緯	33° 33' 58"
東経	130° 27' 14" (世界測地系)
調査期間	20120507~20120613
調査面積	315m ²
調査原因	住居(賃貸用)、デイサービス、事務所建設
種別	生産跡
主な時代	弥生時代早期から中世
遺跡概要	中世水田畦畔、弥生時代水田
特記事項	夜白式期の環境復元と弥生時代中期、中世期の田面大規模化



建築物完成写真

板 付 12

—板付遺跡 第72次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1220集

2014(平成26)年3月24日

発 行 福岡市教育委員会

印 刷 株式会社 宣巧社

